

混和会とは、共に許し合いながら、他の人格を尊重し、共に生きる和の構築を目指す集いです。

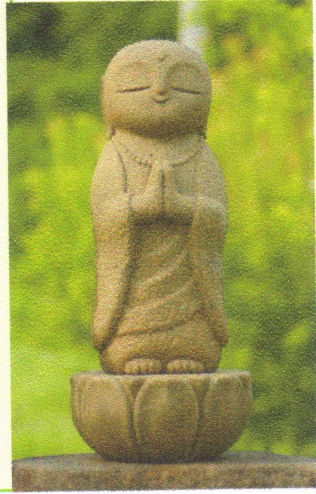
ほとけの混和会だより

平成二十九年六月

東光院

仏の混和会

第127号



人は、何の為に生きているのか

NO.5

このテーマは、今回で五回目私達は「仏に成る為に生きてい」と先ず、結論を提示し、菩薩の道を求めて参りました。そこで今回は、仏の境地に至る為に、どのように歩んで行つたら良いのか探って参りたいと存じます。

仏の境地とは、様々な迷いを克服し、大いなる慈愛心である、仏心に目覚め、「真の幸」を会得し、揺るぎない安心に抱かれる境地で御座います。ですから、この現実社会において、「仏の境地」に至らなくてはなりません。その仏の境地に至る方法に、

善因善果、悪因悪果、自因自果

「善因善果、悪因悪果、自因自果」と言う教えがありますのでご紹介致します。これは、善い行い「業」には善い結果が得られます。悪い行い「業」には悪い結果が生じますよ。それは全て自ら招いた結果です。善因とは善業とも言います。インドの言葉で「カルマ」と言っています。おそれ、そのエネルギーは、先ず善い思いのエネルギーは、善い言葉となり、善い行動へと変化し善い結果と成って行きます。又遠い過去から引き継いだエネルギーも、私達の行いが「縁」となり、現在の結果と成って行きます。仮りに過去より引き継いだ悪因も己自身が善因の功徳を巡らす良縁によつて善果へと変える事が出来ます。共に善縁として善因の種を播き、善い縁を巡らして参りたいと存じます。合掌

迷いを越える



ねーねーお坊さん「人は何の為に生きているのか」迷いと言うのじゃないの？

そうなんじゃよ。君は痛いところを付いてくるね。



最近よく耳にする鉄道の人身事故とか、無差別殺傷事件など暗いニュースばかり飛び込んで来るものだから「みんな迷いの中」に生きているのだな、なんとか生きていける事、確かな指針が掴め無いか「な」と思い病んで、かかげたタイトルなんじゃよ。でもね、お釈迦様も人々の様々な迷いや苦しみを見て聞いて、その苦しみを解きほぐす方法はないものかと、自尊自身も迷い苦しんだのじゃ。そして「三宝」に帰依する環境を築くことよって様々な迷いを克服できると確信を得たのじゃよ。この「三宝」とはね、仏「ブツダ」大自然大宇宙の大いなる生命法「ダルマ」大自然大宇宙の

大いなる導き

僧「サンガ」大自然大宇宙の大いなる導きの元に集う私達、又寄り添う仲間

要するに、「ブツダ」という「よりどころ」「ダルマ」という「よりどころ」「サンガ」という「よりどころ」この三宝に帰依する「よりどころ」が築ければ、生きる事の意義、又指針も掴む事が出来ると言う事なんじゃ。私自身も、僧侶としてなるとかこの「よりどころ」を築く事が出来ないだろうか、この現実社会において、何を手段とし何を方法とすれば良いのか、などと思病んでしまったのじゃよ。そして、毎日このような事ばかり考えていたら多生鬱状態に陥り、人とのコミニケーションがギクシャクとスムーズに行かなくなってしまうのじゃよ。でも、釈尊も同じように、迷い苦しみを抜いた後に光明を見いだすことが出来た。だから私の迷いも何時かは明るい光が差し込めてくると信じているのじゃよ。善因、他の幸を願う思い、そのエネルギーが行動と言う善い縁となり、結果は自然に巡り巡ってくる。後は全て御仏にお任せなんじゃ。亮観拝



日本仏教に登場する仏様を、毎月少しずつご紹介。今回は菩薩部の文殊菩薩を紹介します。

● 菩薩部 文殊菩薩

「三人寄れば文殊の知恵」という三人集まって相談、協力すれば良い知恵が出てくる。という「ことわざ」をご存じかと思いますが、この「ことわざ」に出てくる文殊とは今回ご紹介する文殊菩薩を言います。

正式名を文殊師利菩薩といい、このことわざに有るように智慧を司る仏様で、他の仏様に説法をするほどの智慧の持ち主とされています。つまり頭がとてつもない仏様です。

文殊菩薩にはモデルとなった人物がいるという説もあり、元々は他の宗教の家に生まれたが出家し、お釈迦様の弟子となられたと言われています。

その頭の良さからお釈迦様からも信頼を置かれており、お釈迦様の亡くなった後、ヒマラヤ山脈に居られた多くの仙人にお釈迦様の教えを説いて回っていたとされています。

そんな文殊菩薩も最初は普通のお釈迦様の弟子として経典に記載されていたのですが、時代と共に神格化され、菩薩となり現代に至ります。

菩薩となった文殊菩薩の姿は様々な仏像が造られ、子供の様な「童子文殊」や老僧に見立てた「僧形文殊」などがあります。

その中でも目を引くのが大きな獅子に乗った姿の文殊菩薩で、右手には煩惱や迷いを断ち切る剣を持ち、左手には経典や蓮の花を持った姿をしています。

大きな獅子は智慧の威徳を表し仏の智慧の象徴とされています。お釈迦様が誰に対しても恐れる事無く説法した姿を獅子と重ねたと言われています。

そんな智慧を司る文殊菩薩は卯年の守り本尊でも有り、卯年に生まれた人々を見守ってくれています。そのため、卯年の方は一度はお礼参りに行くのも良いかも知れませんね。



院文殊菩薩像 奈良 倍文殊菩薩像 安曇 騎獅文殊菩薩像 奈良 国宝

余談：寺社の門番として見かける獅子と狛犬。どちらもよく似ています。が違いをご存じでしょうか。実は口を閉じて頭に角が有るのを狛犬、口を開けて頭に角が無いのを獅子と言います。

亮澄拝

深大寺白鳳仏が 国宝になりました



先月二十一日

法助先で日頃よりお世話になっております調布深大寺におきまして、国宝釈迦如来像の奉迎式が盛大に執り行われました。

奉迎式とは、調査等の為に長く留守にされておられた、お釈迦様のお帰りを御祝いする儀式です。

当日は暑さを感じさせる程の晴天のなか、天台宗務総長や調布市長といった来賓の方々をはじめ、多くの参拝客に見守られながら、国宝と成られたお釈迦様のお帰りを御祝い致しました。

深大寺の創建は天平五年(七三三年)と都内では二番目に古く、長い歴史を有する古刹であります。この度国宝指定を受けられた釈迦如来像(白鳳仏)はそれよりも古い七世紀(八世紀初頭(白鳳期)に機内地域にて鑄造されたといわれてお



ります。

本像は保存状態の良さや、完成度の高さから法隆寺観音菩薩立像、新薬師寺薬師如来立像(現在は盗難)と並び白鳳三仏とよ

ばれ、その優れた造形は当時の一流工人によって手がけられたものとされております。

また、都内には二体の国宝仏が存在しますが、もう一つの大倉集古館蔵普賢菩薩騎象像は美術品として収集されたものであるため、寺院伝来の仏像としては唯一、東日本全体でも最古の国宝仏とされており

ます。いづれにしても一三〇〇年以上前の人間により命を吹き込まれた御像が現代の私たちの前に変わらぬ姿を残しているということ、この間大小問わず多く事象があつたこと、長いが、長い年月のなかで多くの人々とご縁を結び、それを見守り見つけ、祈りを受け止めてきた白鳳仏の重みを一度実感していただければ幸いかと思います。優しくゆつたりとしたお姿の白鳳仏様、果たしてその目に私たちはどのように移っているのでしょうか。

亮敬拝

